下野（しもつけ）新聞 2006.08.16

声なき声

生命のメッセージ展inとちぎ 4

絶対、加害者にならないで

東名高速追突事故

井上 奏子（かなこ）ちゃん 当時3歳
周子（ちかこ）ちゃん 当時1歳
（千葉市）

二人の遺骨は家にある。「あの子たちにとって、ここが生活の場」

父親の井上保孝さん（五六）は、祭壇に並んだ奏子（かなこ）ちゃん＝当時（三）、周子（ちかこ）ちゃん＝当時（一）＝の遺影を見つめる。

十歳と八歳のお姉さんになっていたはずの二人に、弟と妹が三人できた。事故の時、母親の郁美さん（三六）のおなかにいた三女典子ちゃんは小学一年生になった。

周りは新たな命の誕生を喜んでくれる。「二人の生まれ変わりだね」。でも郁美さんは「そうじゃない」と心の中で繰り返す。「私たちにとっては、いつまでたっても二人足りないんです」

保孝さんの左腕と背中にはやけどのあとが広がる。皮膚移植を繰り返した太ももは、白っぽく変色。痛みは今でもある。

一緒に入浴すると、子どもたちは聞いてくる。「パパ、じこのせいでそうなっちゃったの？」

それでも保孝さんはつらそうにしない。傷あとを隠そうともしない。「奏子と周子が苦しんだことを考えたら…」

バックミラーに映った黄色い大型トラックが迫る。「あちゃい」。後部座席から聞こえた最期の声、炎上する車内。あの日の光景は目を閉じるとよみがえる。

事故から六年と八カ月。加害者の家族は月命日に欠かさず供え物を送ってくる。しかし加害者本人は出所の翌々日に、一度謝罪に来ただけ。

「これからどういう気持ちで償っていくつもりですか。自分が犯した罪の大きさを忘れていませんか…」。郁美さんは加害者に聞いてみたい。

奏子ちゃん（左）の3歳の誕生日を家族で祝う。右は周子ちゃん、中央は郁美さん。撮影したのは保孝さん＝1999年4月、千葉市の自宅

飲酒運転撲滅へ 全国行脚

加害者に下された判決は懲役四年。「今の法律は命の重さ、罪の悪質さを反映していない」。全国から声が上がった。三十七万人を超える署名が集まり、危険運転致死傷罪ができた。その中心に井上さん夫婦がいた。

でも二人は満足しなかった。刑を重くするだけでは飲酒運転をなくせないと思った。

署名活動と合わせ、二〇〇一年の春から二人で全国を歩き始めた。小中高校、少年院、警察官研修…。事故の記憶をあえて呼び起こし、悲しみや怒りを訴える。

講演回数は百七十回にもなった。毎回、涙があふれ、言葉に詰まる。でも続ける。「命は奪っても、奪われてもならないもの。一人一人が命の大切さを、もう一度考えてほしい。絶対、加害者にならないで」

二人はいつか天国で、こんな声に出合いたいと思っている。「パパ、ママ、がんばったね」

事故概要　1999年11月28日午後、東京都内の東名高速道路で、酒酔い運転の大型トラックに追突され、井上郁美さん運転の乗用車が炎上した。後部座席で寝ていた長女奏子ちゃんと二女周子ちゃんが焼死。助手席の保孝さんは重度のやけどを負った。加害者の男は飲酒運転の常習者だった。2001年、2人の命日に危険運転致死傷罪の新設を含む刑法改正案が成立した。

18日―20日 宇都宮・県総合文化センター